

## アインシュタインと三宅速

板東 浩

目の前には、アインシュタイン博士と徳島出身の医師・三宅 速（みやけ はやり）博士の姿。この貴重な写真をみた瞬間、心に音楽が満ち溢れてきた。

いま私がいるところは、心のオアシスでもある有楽町の「相田みつを美術館」である。今回の企画は「アインシュタイン日本見聞録」。アインシュタイン（以下ア博士）が相対性理論を発表したのが一九〇五年。物理学および世界の科学にとって「奇跡の年（*annus mirabilis*）」だった。二〇〇五年が「世界物理年」と制定され、記念すべき日独間の特別プロジェクトが実現したのである。運良く私は当時の映像や素晴らしい縁りの品々に触れ、オーディオガイドで臨場感溢れる様々な状況を体験させていただいた。

当時、宇宙に適用できる新理論を理解できる人は稀であった。しかし次第に画期的な学説が認められ、出版社の改造社からア博士に招待状が届いたのである。ア博士は日本客船北野丸に乗り込み、マルセイユの港を出発し、三カ月かかって神戸に到着。一九二二年十一月十七日から四十三日間日本に滞在し、日本縦断のノーベル賞受賞記念講演は各地で大成功をおさめた。その際、ア博士が日本人や日本文化の素晴らしさに感動した記録などが、見聞録としてまとめられたのだ。

さて、三宅速博士について、徳島との関わりやア博士との交流を概説しよう。速は美馬郡穴吹町で生まれ、たぐい稀な秀才として知られ、東大医科を特待生で通し明治二十四年首席で卒業。二十六年には徳島市中洲に本県最初の近代的外科病院を開設した。その後二回のドイツ留学後、九州大学外科学教授を務めた超エリート医師であった。

三宅博士が米、英、仏、伊の各国を視察し日本に帰国するとき、同じ北野丸に乗船していたのだ。ある日、ア博士が排便時の出血と発熱を訴えた。船医の診察を受けたが納得できず、ア博士のエルザ夫人が西ドイツで腹部外科を修めた速に診察を依頼。ア博士自身は大腸癌を心配していたが、三宅博士は急性虫垂炎と診断して治療した。このエピソードがきっかけとなり、両博士は互いに語り合い親交を深めたという。

ア博士が九州へ講演に行ったときのこと。感謝の心を伝えるため、クリスマスの日に福岡市の三宅の家を訪問した。ア博士は令息の博のいがり頭を撫でたり、エルザ夫人は末娘の富子を可愛がったり。ちょうど、速がウィーンから船便で送って到着したグランドピアノを上手に演奏し、弾き初めとなった。

ア博士はバイオリンも嗜み、大好きな音楽がモーツァルト。「死とは、モーツァルトが聴けなくなることである」と述べたほどだ。音楽を愛し理解できる人は、自由に発想できる心を有する。ア博士の特異な風貌とユーモア溢れる言動も関係あるだろう。

これを心理学的にエゴグラム（*egogram*）の観点から分析してみると、天真爛漫な因子 *free child* の優位性が推測される。この場合、様々な考え方や他人を余裕をもって受け入れられるのだ。ア博士は来日中に人に細かな心配りができる日本人を絶賛し、将来も日本固有の文化的価値を忘れないようにと切望していた。

相対性理論のエッセンスは「動いているモノと止まっているモノでは時間の流れが違う」ということ。もしかしたら、ア博士が瞬間の芸術である音楽を聴いているうちに、音と時間と光の関係に気がつき、インスピレーションを得たのかもしれない。

なお、三宅速は穴吹町の光泉寺で永遠の眠りにつき、同所にはア博士の言葉が刻まれた墓碑も建立されている。また、博の長女である比企寿美子（ひきすみこ）は「引導をわたせる医者となれ（春秋社、一九九九）」を著し、未来にその遺産を伝えている。（日本プライマリ・ケア学会理事）